

私はコッコロ
女神アメス様より
主さまのお世話を
任じられております

美食殿での生活も長く
皆さまとの絆も
深まってきており

特に主さまとは…

昨晚の夜も…

沢山のキスを
していただきました

もう幸せで幸せで…

この先も主さまと
ずっとずうっと
歩いていきたい…

だからコッコロは
頑張ります！



「やあ、お目覚めかい」

「……依頼主さま
これはいったい……?」

「言っただろう?」

「とても良い食材が
手に入ったとね」

「それは君のことだよ
コッコロ君」

「私も美食家でねえ」

「君のような
育ち盛りの子を
頂くのが
大好きなんだ」

「特に成熟しきっていない
果実を食すのが
至上の喜びでね」

「う……動けない……力が……」

「まさかあの香りは……」

「その通り、牝を痺れさせ、
快楽を与えてくれる……
いわば媚薬だ」

「私のはとても
大きいからねえ」

「だが時期に
気持ちよくなる」

「ひっ!!」

「では頂くとしよう」

「まだ熟していない
極上の果実」

「おやめください!!」

「入るわけが……!!」

「ククツツのピツタリ
閉じて拒んでいる割れ目」

「フン!!」

「だ……めっ……っ!!」

「裂け……」

「これを待ち望んで
いたのだよ!!」

「ぬおおっ!!」

「あ……っ」

『ヌウウウンっ!!』

『あああああ…っ!!』

『素晴らしい!!』

『実に素晴らしい
締め付けた!』

『…そんな…』

『初めては…
主さまに…』

『心配せずとも、
これからは私が
君の主だ』

『いや…いやで
ございま…す…!!』

『ククク、いいぞ』

『抵抗する意思と
肉棒を押し出そうとする
肉壺、どちらも
イキがよい!』

『くる…し…っ!!』

『主…さま…っ!!』

『少し早いが奥も
ほぐさねばな!』

『あ…っ…やあ…!!』



「フン...!!」

「フンフン...!!」

「...やああつ!!」

「フン...!!」

「あ...あ...あ...あ...!!」

「私の剛直をここまで加えこんでくれるとは実に素晴らしい!」

苦しい...アソコが...私の中が引っ張り出されて...
しまいそうです...

それなのに...
突かれるたびに、
どんどん熱くなってる!

「わかるだろう? 子袋の入り口をさじ開けているのが!」

「ここが、牝の一番美味なところなのだよ!」

「そんな...
こと...?」
あああつ...
何かが...
昇ってきて...

この感覚、
怖い...のです
主...さまあ...!!

「フン!」
「声もいやらしくなってきた。
媚薬が効き始めて来た頃か」



『なら君の子袋はもう
私の子種を受け入れる
準備ができている頃だ』

『たっぷり
射精させて
もらおうじゃないか』

『君に使うた媚薬は
協力だね』

『今ごろ、君のように
未熟で無防備な卵が
子袋に向かっている
ころだろうよ』

『お待ちくださいー』

『それだけは…!!
それだけは
ゆるしてください
ませっ!!』

『言っただろう
君を孕ませると!!』

『だめっ!!』

『なら、今から私が君の主だ!!
安心して受け取りたまえ!!』

『新しい「主」の子種をなっ!!』

『お嬢様もさあ』

『お嬢様もさあ』





『とりあえず続きと
行こうじゃないか』

『君の子袋は
どれくらいで
堕ちるかねえ?』

『楽しみだよ』

『くおおおっ 孕めっ!!』

『孕めえっ!!』

『あっ!!』

『あああっ!!』

『ふう、たっぷり
受け止めてくれたねえ』

私の中に…
…熱いものが
一気に流れてきて…っ!!

『でもまだ始まったばかり』

『ハハハハハっ!!』

